

ピエール・プレヴォの経済思想

喜多見 洋

ピエール・プレヴォの経済思想

喜多見 洋

目 次

I. はじめに	5
II. ピエール・プレヴォとその時代	6
III. プレヴォの経済思想	9
1. 初期の経済思想	10
2. 中期の経済思想	18
3. 後期の経済思想	22
IV. 「文芸共和国」と経済学クラブ	25
V. 結び	28
参考文献	31

ピエール・プレヴォの経済思想

喜 多 見 洋

I. はじめに

ヨーロッパの歴史において 18 世紀後半から 19 世紀前半の時期は大きな変化の時期である。この時期、大陸では、大国フランスにおいてアンシャン・レジームを破壊するフランス革命が起り、その後の政治的、社会的混乱とナポレオン帝国の出現はフランス一国だけでなく全ヨーロッパを戦乱に巻き込んだ。そして戦禍の後、ナポレオン帝国の崩壊とともに王政復古が実現しても、ヨーロッパにはそう簡単に政治的、社会的安定はもたらされなかった。ここに取り上げようとしているジュネーヴのアカデミーの教授ピエール・プレヴォ¹は、この変化の時代を一人のジュネーヴ人として身をもって体験した人物である。

ここで、あえて「ジュネーヴ人として」と書いたのは、この時期ジュネーヴもまた共和国建国以来の変化を経験しており、これがプレヴォにも無関係でなかったからである。すなわち彼は、生涯において自分の意思とは関わりなくフランス人になったり、スイス人になったりしているのである。というのは、彼の郷土ジュネーヴ自体が、この時期、中世以来の都市国家である「ジュネーヴ共和国」から、フランスへの併合により「フランスの一都市」となり、ナポレオン帝国崩壊後は「スイスの一カントン」へとその政治的形態が大きく変化しているからである。そして、これがプレヴォの知的活動にも少なからぬ影響を与えている。

プレヴォは、今日ではマルサス『人口論』の仏訳者として取り上げられることが多いが、彼の経済思想をここで取り上げるのは、一つには「古典派経済学の生成、確立」の過程を大陸の視点で見たいからである。彼の生きた時代は、経済思想史で言えば、アダム・スミスの『国富論』(1776)が登場する前から D. リカードウの『経済学および課税の原理』(1817)やシスモンディの『経済学新原理』(1819)、T. R. マルサスの『経済学原理』(1820)が出版された後の時期までにあたっており、彼の経済思想に注目することで大陸から見た西欧経済思想の展開の様子を知ることが期待できるからである。プレヴォの経済思想を取り上げるもう一つの理由は、彼の知的活動の国際性にある。彼は、若い頃からフランス、イギリス、プロイセン、等を訪れ、そこでの滞在をつうじ、ヨーロッパ規模での知的交友関係を築き上げてきた。そして、ジュネーヴ・アカデミーの教授に就任した後もジュネーヴという特殊な国際都市にあって経済

* 本稿は、平成 26 年度科学研究費補助金「基盤研究 (C) 課題番号 26380263 ピエール・プレヴォの経済学と啓蒙期ヨーロッパの知的ネットワーク」による研究成果の一部である。

1 Pierre Prévost (1751-1839). プレヴォについての研究としては、Schulthess [1996]、Kitami [1999]、Kitami [2012]、喜多見 [2005]、喜多見 [2008]、中宮 [2010]、中宮 [2011]、中宮 [2012] がある。

学を含む様々な科学のヨーロッパ規模での普及、伝播、交流に深くかかわっており、この時期の西欧経済思想の国際的な普及、伝播、交流を知る手がかりとなることが期待できるからである。さらに、ドゥ・サリスやパッペが述べているように、プレヴォがシスモンディ²の先生であったという点にも留意しておく必要があるだろう³。

これらの点をふまえ、本稿ではまずプレヴォがいかなる人物で、彼の生きた時代がどのような時代であったのかという点について考えてみる。そして次に、彼の経済思想がどのようなものであったのかについて、ジュネーヴがフランスに併合される以前の時期（初期）、ジュネーヴのフランスへの併合期（中期）、さらにジュネーヴがスイスに加わる王政復古期以降（後期）に分けて検討する。さらに、プレヴォの知的活動の国際性に留意しつつ彼の経済思想と同時代の知的ネットワークとの関係についても考えてみたい。

Ⅱ. ピエール・プレヴォとその時代

それでは、ピエール・プレヴォとは、どのような人物だったのであろうか⁴。一言で言えば彼は、18世紀後半から19世紀前半にかけて、活発に知的活動を展開したジュネーヴのアカデミーの教授である。プレヴォが行なった研究は、哲学、文学から物理学さらには経済学にまで及んでおり、特定の学問分野に限定されていない。『哲学試論』⁵(1804)といった哲学の著作や『磁力の源泉』⁶(1788)、『熱にかんする物理工学』⁷(1792)、『放射熱にかんする試論』⁸(1809)など自然科学分野の著作をいくつも残すとともに『二つの革命の比較』⁹(1790)、『ジュネーヴ、平等、独立、自由』(1793)など社会、経済問題に関してもいくつもの論考¹⁰を残しており社会科学者でもあった。このように彼は、多方面に及ぶ知的活動を展開していた学者である。

彼の生涯を簡単にたどっておくと、プレヴォは、1751年にアブラハム・プレヴォと妻マリー・ベラミーの間にジュネーヴに生まれている。まだジュネーヴ共和国の時代であり、1755年からはヴォルテールがこの町の郊外に住みはじめ、1762年には共和国当局によるルソーの『社会契約論』、『エミール』の焚書事件¹¹がおこり、町の中に請願派と拒否派の対立状態が生まれるといった時代である。まさに彼の身近なところで啓蒙とそれが古い社会にもたらす軋轢が生じていたといっていよいだろう。そんな中で育ち、ジュネーヴのアカデミーで神学、法学を学

2 Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi, 1773-1842.

3 Pappe [1963], p. 35 ; de Salis, Jean-R., [1973], p. 17.

4 プレヴォの生涯と業績については、de Candolle [1839], Cherbuliez, A. [1839], 中宮[2010]がある。

5 Prévost [1804].

6 Prévost [1788].

7 Prévost [1792].

8 Prévost [1809].

9 Prévost [1790].

10 Prévost [1782] ; Prévost [1783] ; Prévost [1789] ; Prévost [1790] ; Prévost [1793] 等がこれにあたる。

11 ルソーの二著作の焚書事件については田中秀夫編著[2014]所収の拙稿「ルソー焚書事件とプロテスタント銀行家」を参照されたい。

んだ彼は、1773年に法学で博士の称号を得ている。その後、オランダで一年間、家庭教師をしてから、イギリスを旅して、フランスへ行き、スイス(Vaud)系のプロテスタント銀行家ドゥレセル家で約5年間家庭教師をする。その時の教え子が、後に下院議員、フランス銀行理事、学士院会員となるバンジャマン・ドゥレセル¹²である。また、この時期プレヴォは、ドゥレセル家の縁で晩年のJ.-J. ルソーと知り合い、交友関係を結ぶ機会を得ている¹³。

1778年にエウリピデスの翻訳¹⁴により文学者として世に出た彼は、啓蒙専制君主として名高いプロシア王フリードリヒ2世の目にとり、1780年にプロシアの科学アカデミー会員ならびに貴族学院(l'Académie des nobles)の教授としてベルリンに招聘される。彼はそこで学術研究にいそしみ、物理学者、数学者のラグランジュ¹⁵、哲学者のメリアンらと親しくなる。『現代の政府の経済と比較した古代の政府の経済についての論考』(1783)のような著作も残すが、父の病気もあり1784年に辞職し、ジュネーヴに戻りアカデミーで文学の教授に就任する。だが、彼は、この時は教授職に長くとはどまらず、1年ほどで辞任してしまう。そして以後も学術、研究面での活動を活発に続けながら、ジュネーヴの政治面でも活躍するようになる。すなわちプレヴォは、1786年にジュネーヴ共和国の拡大市参事会のメンバーに加わり、1793年には、この町の国民議会(l'Assemblée nationale)のメンバーにもなっている¹⁶。一方、彼は、同じ年にジュネーヴのアカデミーで、今度は物理学および哲学の教授に任命され、その後は長く教授職を続けることになる。

こうして学術研究の面から見るとプレヴォの生涯は順調といってもよいかもしれないが、時代は彼の生涯を穏やかなものにはしなかった。彼もまた、郷土ジュネーヴとともに時代の影響を少なからず被っている。フランス革命の激化はフランスの周辺地域へも波及し、それまで比較的平穏であったジュネーヴ共和国でも1794年夏に革命派が町の政治を掌握し、プレヴォは反革命容疑者として逮捕、投獄されてしまうのである。幸いフランスにおけるテルミドールのクーデタ発生とともにジュネーヴの政治状況も大きく変わり、プレヴォは20日ほどで釈放される。その後も彼は教員生活を続けるが、1798年には、今度はジュネーヴ共和国自体がフランスに併合されてしまう。250年以上続いたジュネーヴ共和国の終わりである。併合下のフランスで彼は、ジュネーヴのフランスへの併合を実施する委員会に加えられ、フランス学士院の通信会員となる栄誉に与る。そして1814年のナポレオン帝国の崩壊とともにフランスへの併合が終り、独立を取り戻したジュネーヴは結局スイスに加わることを決めるが、彼はこの体制下

12 Benjamin Delessert, 1773-1847. 彼は、プレヴォの教えを受けた後、1780年代にスコットランドに留学して、アダム・スミスとD. スチュアートにかわいがられ、ワットと親しかったとされている。スチュアートは、1817年8月8日付けのプレヴォ宛の手紙で「我々の共通の友人バンジャマン・ドゥレセル氏」と書いている。Cf. Etchegaray, C., & Haakonssen, Schulthess, Stauffer, Wood [2012a], p.10; [2012b], p. 60.

13 プレヴォとドゥレセル家、ルソーの関係については田中編[2014]所収の拙稿を参照。

14 *Tragédies d'Euripide, traduites par M. Pr.... [Prevost.] Oreste*, Paris, 1778.

15 Joseph-Louis Lagrange, 1736-1813.

16 だがプレヴォは、4ヶ月で国民議会の議員を辞めてしまう。

で代表評議会(Conseil représentatif)¹⁷の一員としてこの町の政治にかかわることになる。そこで彼は、能力を発揮し、スイスの一カントンとなった新しいジュネーヴの発展に貢献するが、1823年には公職を全て辞任し、残りの生涯を学術研究に捧げて1839年4月に亡くなっている。

こうしたプレヴォの生涯を念頭におきながら彼の知的活動の特色を整理すると、次のようになる。

第一に注目すべき点は、なんといってもプレヴォが長命であり、知的活動の期間もかなり長く、活動内容も多方面にわたっていたということである。彼は、フランス革命以前の1770年代からすでに知的活動を始め、ルソーと交友関係があり、80年代にはドイツ啓蒙も実際に体験していた。しかも19世紀に入っても活発に活動し、マルサス、リカードゥ、J.-B. セーと交流を重ね、彼らと経済学的議論を行っていたことも書簡等で確認されている¹⁸。そして「D. ステュアートについての伝記的覚書」¹⁹が発表されるのは1836年、彼が85歳の時である。

第二に指摘できるのは、プレヴォとイギリスとのつながりの深さである。これは一つには、スコットランドとの知的つながりの深さとしてあらわれている。プレヴォは、アダム・スミスの伝記作者、全集編集者として知られ、スコットランド啓蒙の掉尾に位置している哲学者デューガルド・ステュアート(Dugald Stewart, 1753-1828)と親しかった。彼は、後述するように、このつながりをとおして、イギリス、とりわけスコットランドの様々な学問分野の情報の普及、交流に貢献している。

もう一つは、イギリスとの家系的結びつきである²⁰。プレヴォの妻はマーセット家の出であり、『経済学対話』(1816)²¹を著わしたジェイン・マーセットは、彼の義妹にあたっていた²²。そんな関係もあり、彼の息子たちはイギリスで働き、長男アレクサンドルはロンドンで事実上のスイス領事の役目も果たしており、イギリスに帰化することになる。

第三に注目すべき点は、ドイツ啓蒙とのかかわりである。プレヴォがベルリンに招聘され、プロシア科学アカデミー会員、貴族学院教授となったのは、ドイツ啓蒙への多大な貢献で知られているフリードリヒ2世の治世の晩年、1780年のことである。そして彼が上の職を辞するのは、カントが「啓蒙とは何か」を『ベルリン月報』に発表する1784年のことである。したがって4年間ではあったがこの間、彼は、ディルタイのいう「啓蒙主義の新しい中心点」²³たるベルリンにあってドイツ啓蒙をじかに体験している。確かにこの運動自体は「上からの」啓

17 代表評議会は、もともと Conseil d'Etat の政令の承認機関として考えられていたが、スイス参加後のジュネーヴにおいて実質的には真の批判的議会として機能する。

18 プレヴォと同時代の経済学者たちとの交友関係については、喜多見[2005]および Kitami [1999]を参照。

19 Pierre Prévost, 'Notes biographique sur Dugald Stewart', *Bibliothèque universelle de Genève*, new series, t. 4, 1836, pp. 238-69.

20 プレヴォの家系に関しては、Perroux [2006]が有益である。

21 Jane Marcet, *Conversations on Political Economy*, 1816.

22 マーセットについては、飯田・出雲・柳田編[2006]所収の出雲雅志「ジェイン・マーセットと経済学の大衆化」を参照。

23 ディルタイ[1975], p. 51.

蒙という性格が強かったかもしれないが、このドイツ啓蒙を担った知識人たちとのつながりは、彼がジュネーヴに戻った後も続いていた。

第四に、プレヴォの場合にはその知的活動の中で翻訳の占める割合が大きく、学術雑誌の刊行にも協力していることが指摘できる。そもそも彼が世に知られることになった出発点からしてエウリピデスの翻訳であり、その後もスミスの『哲学論文集』仏訳や、D.ステュアートの『人間精神の哲学要綱』²⁴の仏訳、ヒュー・ブレアの『修辞学と文学に関する講義』仏訳²⁵、B.ベルの『農業論集』²⁶の仏訳（仏訳は部分訳で『欠乏』）、マルサスの『人口の原理』仏訳も出版している。さらに彼は、イギリスの最新の学術情報を主に抄訳、抜粋の形でフランス語世界に紹介する雑誌『ビブリオテーク・ブリタニク』²⁷やその後継誌にも寄稿を行うとともに、編集、刊行にまで協力していた。

このように見ると彼は、啓蒙の末尾に位置して、長期間活発に多様な知的活動を展開し、特に知の交流に貢献した知識人であったことがわかる。ではそうした彼の経済思想はいかなるものだったのだろうか。

Ⅲ. プレヴォの経済思想

プレヴォの知的活動は、IIで見たようにアンシャン・レジーム期から七月革命後まで長期にわたって、その間には彼を取り巻く経済学の世界の状況も大きく変わる。そして、それにつれてプレヴォの経済思想も変化している。彼の経済思想を知る手がかりとなる主な資料は、現時点では彼の著作、論文、書簡、講義ノート等ということになるが、ここでは、このうちの講義ノートと書簡についてあらかじめ述べておきたい。まず彼がジュネーヴのアカデミーで行った経済学の講義ノートについては、ジュネーヴ図書館(la Bibliothèque de Genève, BGE)に保存されている²⁸。その中では、G. ガルニエ、マルサス、リカードゥ、J.-B. セーをはじめ、シスモンディ、ジェームズ・ミル、トレンズ、ガニール等が扱われており、19世紀初めにヨーロッパ大陸で行われていた経済学の講義の中味を知ることができるという点で大変貴

24 Dugald Stewart, *Eléments de la philosophie de l'esprit humain*, 2 t., Genève, Paschoud, 1808。プレヴォによる仏訳の第1巻と第2巻は、*Elements of the Philosophy of the Human Mind*, London, 1792の翻訳である。

25 Hugu Blair, *Cours de rhétorique et de belle-lettres*, traduit de l'anglois par Pierre Prevost, 1808.

26 Benjamin Bell, *Essays on agriculture with a plan for the speedy and general improvement of land in Great Britain*, 1802. 原典は、四つの論文と三つの補遺からなるが、プレヴォはこのうち4番目の論文“Of Scarcity of Provisions, and Dearth”のみを翻訳して Bell [1804]として出版した。

27 *Bibliothèque britannique, ou Recueil Extraît des Ouvrages Anglais périodiques et autres ; des Mémoires et Transactions des Sociétés et Académies de la Grande-Bretagne, d'Asie, d'Afrique et d'Amérique*. (以下 *Bb* と略記する) この雑誌は、「文芸」、「自然科学および技術」、「農学」という3つのシリーズからなり、1796年から1815年までジュネーヴで刊行されていた。*Bb*については、喜多見[2008]、Bickerton [1986]を参照。

28 プレヴォの経済学関連のマニュスクリプトは Ms. suppl. 1060 の /1 から /11 に主要なものがおさめられている。

重である。瞥見しただけで、ガニールへの注目、リカード『原理』第3版への言及など興味深い特徴がすぐ明らかになる。ただしこの講義ノートは、様々な大きさの紙片から構成されるカード形式になっており、これが小型のカートンの中に保存されている。講義の構成は紙片の追加や削除、並べ替えによって簡単に変更可能であり、実際に経済学を講義するには便利であるが、分析対象とする場合には各紙片の日付の特定が容易でないという難点がある²⁹。一方、書簡については、プレヴォ宛書簡の多くがジュネーヴ図書館に残されており、そのうちD. スチュアート、マルサス、セー関連のものは活字化されている³⁰。これに対し、プレヴォ自身の書簡はその多くが分散しているが、一部はジュネーヴ図書館に写しが残されていて利用できる。

こうした事情を考慮し、本稿では、主にプレヴォの著作、論文、書簡を利用して、彼の経済思想を初期、中期、後期に分けて検討することにする。

1. 初期の経済思想

そこで、まずプレヴォが知的活動を開始してから、ジュネーヴがフランスに併合されるまでの時期（初期）である。ここでは、初期の三著作と翻訳を取りあげるが、特に初期の経済関連の著作についてはこれまでほとんど取りあげられていないので、逐次的に行論をたどることにする。

(1) 『現代の政府の経済と比較した古代の政府の経済についての論考』（1783）

社会科学の領域で最初に注目すべきなのは、『現代の政府の経済と比較した古代の政府の経済についての論考』³¹である。プレヴォが、プロシア科学アカデミーに在籍中の1783年にまず『王立アカデミー新論文集 第14巻』（1783）の思弁的哲学部門(*Classe de philosophie spéculative*)に発表したこの著作は、彼の初期の経済思想を検討するのに格好である。

この著作で行なわれているのは、論題が示すように18世紀の政府の経済と古代の政府の経済の比較である。但し、ここで使われている「経済」という語の意味は、今日われわれが普通に使用している「経済」という語の意味とはだいぶ異なる。それは、おおそ今日の財政管理あるいは統治といった意味であり、この著作の主要課題は、上の比較をつうじてそうした意味での「経済の原理を把握する」³²ことになる。著作のはじめの部分で彼の基本的立場が、次のように示されている。

29 現在では、閲覧が、原則としてマイクロフィルムによる閲覧とさらに利用しにくくなっている。

30 D. スチュアート関連の書簡については、Etchegaray, C., & K. Haakonssen, D. Schulthess, D. Stauffer, P. Wood [2012b]を、マルサス関連の書簡についてはZinke [1942]を、さらにセー関連についてはKitami [1999]を参照。

31 Prévost [1783].

32 Prévost [1783], p. 388. 18世紀、とりわけ18世紀のフランスにおいて*l'économie*もしくは*l'économie politique*という語が持っている今日とは異なった意味については、すでに木崎[1976]、安藤[2014]が指摘しているところである。

「何人かの論者の古代の国制についての称賛は、私には常にはなはだ行き過ぎているように見えた、そして現代の政府の誤りは、弁解の余地がない有害なものであるが、私にはいくつかの点で、古代国家の偏狭な見方や未熟さがもたらした惨禍よりも好ましいように思われる。」³³

すなわちプレヴォは、彼の時代の何人もの論者が古代の国制を称賛していることを問題にする。彼には、それが行き過ぎであるように見えるのである。一方、彼が「弁解の余地がない有害なもの」と評している現代の政府の誤りとは、この世紀の初めに起ったジョン・ローのシステムをめぐる混乱がその代表例のようだが、彼はそれでも「古代国家の偏狭な見方や未熟さがもたらした惨禍」よりもまだましだとするのである。こうした見地からプレヴォは、古代の政府と現代の政府とを対比する。その場合ポイントとなるのは経済学である。これについて彼は、次のように述べる。

「現代のある著者は、経済学という科学を三つの原理に帰着させる；一般意志に従う、公徳を刺激する、そして国家の欲求に必要なものを提供するということがそれである。……私が、全体にわたってではなく、それによって政府が、不変で力強い財政管理の求める通常のおよび例外的な欲求、すなわち国庫の維持のために使用される資金と秩序に必要なものを提供する直接的手段に限定して取り組もうとしているのは三点目である。」³⁴

ここに出てくる経済学もまた、今日われわれが考える意味とは異なっている。プレヴォはここでは具体的に名前こそあげていないが、彼のいう「現代のある著者」とは、ルソーのことであり、「経済学という科学を三つの原理に帰着」させているのはルソーの『政治経済論』（1758）である³⁵。そしてプレヴォがこの論文で扱っているのが、「それによって政府が、不変で力強い行政管理の求める通常のおよび例外的な欲求、すなわち国庫の維持のために使用される資金と秩序に必要なものを提供する直接的手段」だということになる。

そうしてさらに彼は、この古代と現代の対比における経済学という科学の重要性を強調して次のように述べている。

「われわれの歩みを明らかにする歴史の松明(flambeau)となる古代国家の経済学に関する同時代の著作を欠いたわれわれは、もし指針として類推の糸を持っていなければ、古代とい

33 Prévost [1783], p. 380.

34 Prévost [1783], p. 381.

35 プレヴォがここで暗に言及しているのはルソー『政治経済論』である。Cf. Trousson et Eigeldinger (éds.), [2012], vol. V, (『ルソー全集』第5巻、白水社、1983年)。なおプレヴォはこの著作の他の箇所(Prévost [1783], p. 406)では、明示的に『政治経済論』に言及している。

う闇の中で道に迷ってしまう危険があるだろう。」³⁶

こうした考え方をもとにプレヴォは、本論を第1項「通常の財政管理」、第2項「金策」、第3項「原理」の三つに分けて、現代の政府の経済と古代政府の経済の比較を進める。第1項ではプレヴォは、国庫と宗教施設の関係に着目しながら「古代の政府における財政管理を瞥見」³⁷し、もともと古代にあっては神殿等の宗教施設に蓄えられた聖職者の富と国家の財産が明確に分けられていなかったのが、時代が下るにつれて宗教施設の神聖な財宝(trésor sacré)と国庫が次第に分離して、国庫が確立されることになったと述べる。

第2項では、聖職者からの資金の拠出や植民地に対する強制的分担金、献金の徴収など「古代国家が、危機や緊急の時に頼った金策」³⁸が取り上げられ、古代の政府が緊急の場合に頼ったこれらの金策が現代の政府が用いる金策と比較されて、古代政府の金策が主に策略や暴力に依拠したのに対し現代の政府の金策は愛国心、自発的犠牲に期待するという点に相違を見ている。

そして第3項では上の考察をもとに、古代の政府と現代の政府がもたらしたものは、どちらがましかということが取り上げられる。プレヴォは、歴史的に「戦争が、財政における不変の秩序を不可能なものにし」³⁹、古代ギリシアに、金融の不在、法外な利子、「商業と工芸(les arts mécaniques)」⁴⁰の蔑視といった好ましくない状況をもたらしたのだと考え、古代の「立法者達が、高利貸しと無為という傷を治すため、わずかな局所薬(faibles topiques)に頼り、これらの共和国を苦しめる害悪の源泉に少しも遡らなかった」⁴¹と批判する。これに対し現代については、「数世紀前にヨーロッパの国制がより広範で強固な基礎を持って以来、その価値を下げる偏見はほとんど消滅した」⁴²と述べて現代の政府がもたらしたもののほうがまだましと考えている。

結局、プレヴォにとって古代および現代に共通する目標は、戦争の惨禍がもたらす結果をできるだけ避けながら、「平和の間に正当化された悪習を是正し、公平な配分と有益な改良により人々の負担を軽くして君主の収入を増やすこと」⁴³なのであった

以上のようなプレヴォの初期の経済の論考で注目すべき点は、第一に、経済や経済学という語が、今日われわれが普通に使用しているこれらの意味とはだいぶ異なった使われ方をしていることである。すなわちここで使われている経済という語の意味は、おおよそ今日の財政管理あるいは統治といった意味であり、経済学も政治体の秩序ある統治の学といった意味で用いられている。第二に、この論考におけるルソーへの明示的および暗黙の言及から明らかなように

36 Prévost [1783], pp. 381-2.

37 Prévost [1783], p. 382.

38 Prévost [1783], p. 388.

39 Prévost [1783], pp. 394-5.

40 Prévost [1783], p. 397.

41 Prévost [1783], p. 395.

42 Prévost [1783], p. 397.

43 Prévost [1783], p. 394.

プレヴォがルソーの諸著作、とりわけ『政治経済論』を意識しているという点である。さらに第三に注目すべき点は、彼がヴォルテール、フォルボネ⁴⁴に言及していることである。すなわち、プレヴォはこの論文の終わり近くの本文と注で、リシュリユーが『政治的遺書』⁴⁵におさめた債務の「削減計画(un projet de réduction)」について論じた個所でヴォルテールとフォルボネに言及しているのである。

これらの特徴から言えることは、1780年代前半のプレヴォは、経済学を政治体の秩序ある統治の学と考えており18世紀フランスの古い経済学についての概念をもとに立論しているということである。言及している論者もスミスに先行する論者でありスミス経済学への言及は見られない。

(2) 『金融問題についてジュネーヴに宛てられた三通の手紙』(1789)

だが、プレヴォの経済思想は、彼がジュネーヴに戻ってから著わした『金融問題についてジュネーヴに宛てられた三通の手紙』では、上の論文とは異なった様相を示している。この著作の終わりの部分には、1789年7月28日と記されており、日付だけ見れば7月14日パリでバスティーユ襲撃が発生した2週間後ということになるが、実質的には大革命直前のジュネーヴおよびフランスの経済的社会的状況を背景として書かれた著作と考えてよいだろう。

この著作は、基本的にジュネーヴの貨幣不足の問題とそれに対する対応策を扱っている。ジュネーヴの貨幣不足の問題とは、当時のジュネーヴ共和国が直面していた鑄貨ピストルの不足問題である。彼は、この問題を三通の書簡形式で論じる。まず、第一の手紙では、大国フランスに隣接する小国であるジュネーヴ共和国が、貨幣不足の状況に対して自国の貨幣鑄造を進めることの無益さが説かれるが、これはこの著作全体に共通する基本的主張である。

彼は、「共和国の刻印を押した金貨、銀貨を鑄造することは、ジュネーヴで硬貨の不足(*la rareté des espèces*)を予防する手段だろうか。」⁴⁶と問題を提起する。これに対する彼の答えは明快である。ジュネーヴ共和国の刻印を押した金貨、銀貨を鑄造することは、ジュネーヴの硬貨不足を予防する手段にはならない、というのがそれである。プレヴォは、隣接する大国フランス王国のリラとジュネーヴ共和国のピストルを比較する。

「金銀貨は、金属の価値と刻印の価値という二要素から構成される価値をもっている。一方は百合の紋章(*la fleur de lys*)をつけ、他方は、鍵と鷲の紋章(*la clef & l'aigle*)をつけた同じ重量、純分の硬貨が異なった価値をもつ。最初のは、全フランス、ほとんど全てのヨー

44 François Véron Duverger de Forbonnais, 1722-1800. プレヴォがここで言及しているフォルボネの著作は、*Recherches et considérations sur les finances de la France depuis l'année 1721 jusqu'en 1758*, 1758 である。

45 Armand Jean du Plessis Richelieu, *Testament politique du Cardinal duc de Richelieu*, Amsterdam, 1659.

46 Prévost [1789], p. 1.

ロッパで役立つ道具である；第二のものはただ一つの都市で役立つにすぎない道具である。」⁴⁷

百合の紋章は言うまでもなくフランス王家の紋章であり、鍵と鷺の紋章はジュネーヴ共和国の紋章である⁴⁸。彼は、「一つの都市で役立つにすぎない道具である」ピストルを「ほとんど全てのヨーロッパで役立つ道具である」ルイと交換する場合には手数料が発生することを次のように指摘する。

「ジュネーヴを通るある外国人が、旅を続けるため銀行家に 100 ルイ求めるとしよう：もし銀行家が彼に 100 ピストルを提供したら、彼はそれに満足するだろうか。この事例が無数の形で生じることは明らかでないのか、そしてその結果、ルイに対する手数料(un agio en faveur du louis)が生じるのではないか；だから例えば、100 ルイが 101 あるいは 102 ピストルと同じ価値だと評価されるのではないか。」⁴⁹

そして、「ジュネーヴの刻印を押した貨幣は、貨幣打出し機を出て^{るつぽ}増埒に移るだろう。」⁵⁰ と、ピストルが鑄造されてすぐに溶解される運命をたどることを予見する。結果として、「最初の鑄造の仕事は無駄になり、ほとんどすぐにその仕事を再び始めなければならないだろう。」⁵¹ こうしたピストル鑄造の活動から損失が生じるのは確かだし、必ず誰かがその損失を負担しなければならない。しかも、破壊されて造り直されるピストルを「繰り返し鑄造することは、ルイに対する手数料を増大させ、ピストルの価値を下げるという効果を生むだろう」⁵²。プレヴォはこう考えて、第一の手紙の終わりの部分で次のように述べる。

「これらの考察は、ジュネーヴで金銀貨を鑄造する活動は、そこでの硬貨の不足を予防するのに無益だということを証明しているように思われる、というのは、これらの貨幣は、鑄造されるにつれて、消え失せてしまい、やがて誰もそれを鑄造する気にならないだろうからである。」⁵³

これが、第一の手紙の結論である。

第二の手紙では、ジュネーヴで金銀貨を鑄造することが貨幣不足の問題を解決するのに無益であるだけでなく、厄介な結果まで招くということを明らかにしている。プレヴォは、まずジ

47 Prévost [1789], p. 2.

48 鍵と鷺は、今日でもジュネーヴカントンおよびジュネーブ市の紋章になっている。

49 Prévost [1789], p. 3.

50 Prévost [1789], p. 3.

51 Prévost [1789], p. 3.

52 Prévost [1789], pp. 3-4.

53 Prévost [1789], p. 5.

ジュネーヴ共和国の貨幣鑄造が招く貨幣価値の低下は、ジュネーヴという国家に損失をもたらすことを説く。

「もしジュネーヴの貨幣が商業において価値を下げるなら、国家は、この低下に比例した損失を実感するだろう；というのは、税でこれらの硬貨を受け取らざるを得ず、全てが国庫に戻ってきて、国家は、手数料を失うことによる以外、それを手放すことはできないだろうからである。」⁵⁴

しかも、それだけではない。ジュネーヴでの金銀貨の鑄造は、「一握りの投機家には非常に有益かもしれない」⁵⁵が、それは多くの人々に損をさせることになると指摘するのである⁵⁶。そしてさらに貨幣鑄造をめぐる粗悪な貨幣鑄造の提案や、溶解して分離するのが困難なほど結合されている貨幣を作る提案なども検討される。

このうち悪貨を鑄造する提案に対しては、プレヴォは次のように述べる。

「私はこれまで、それ〔ジュネーヴ共和国が鑄造する貨幣〕には、フランスの貨幣である通貨と同じ重量、純分が与えられるだろうと仮定した。それが変えられる場合には、悪貨がもたらすあらゆる害悪にさらされるだろう。」⁵⁷

こう述べて警告しているし、もう一方の金属を溶解して分離するのが困難なほど結合されている貨幣を作る提案に対しても、ジュネーヴの技術、金属に対する需要、金属の溶解・分離コスト等を考えると非現実的であると、いずれも否定的判断を下している。そして結局、新鑄貨の「使用は、おそらく共同社会(*la communauté*)の残りの人々から得るその利益を増やすであろう少数の投機家を除いて、公や諸個人にとって有害だろう。」⁵⁸と結論するのである。

最後の第三の手紙でプレヴォが検討していることは、ジュネーヴで貨幣を鑄造しようという考え方にどうしても固執する者がいるのなら、鑄造がもたらす不都合をあまり有害でなくする何らかの手段がないかということである。まず大前提として、国家は悪貨の鑄造に手をそめてはならないということを確認したうえで、プレヴォは、どうしたらジュネーヴの貨幣が、フランスの貨幣よりも先に溶解されないようになるか考える。プレヴォによれば、ジュネーヴの貨幣がフランスの貨幣よりも先に溶解されないようにするのはおそらく無理なので、「この貨幣が

54 Prévost [1789], p. 6.

55 Prévost [1789], p. 7.

56 プレヴォは、ここで18世紀後半のジュネーブにおける有力家系の盛衰を意識しているように思われる。

57 Prévost [1789], p. 8.

58 Prévost [1789], p. 10.

できるだけ遅く溶解されるようにしたい」⁵⁹と考へ、「金貨よりもむしろ銀貨を鑄造する」⁶⁰とか「その縁が最も完全で、素材が最も変造しにくく、刻印が最も模倣しにくい貨幣」⁶¹を鑄造するとか、あるいは固定不変の計算貨幣(une monnaie de compte fixe & inaltérable)の使用を定めることも検討されるが、結局のところ決定的効果は期待できないという結論に至る。

ジュネーヴ共和国時代末期の経済問題へのプレヴォの関与を示す著作とあってよいだろうが、ここで特に注目すべきなのは、プレヴォがスミスの見解を援用していることである。プレヴォは、この著作の最後の部分で「ジュネーヴに銀行貨幣を導入するという考へが、二百人評議会(Deux-Cent)で、非常に見識ある人物によって斥けられた」⁶²ことに触れ、次のように述べている。

「その際、彼〔見識ある人物〕は国富についてのスミス氏の著作の一節を引用したが、そこで著者〔スミス〕は、この目的のために創立されたいくつかの銀行の起源を非常に明解に説明し、それらが期待されていた結果を生み出したことを示している。それ故、私が上で述べたことは、よく知られており、経験によって確証された原理の敷衍、適用であるにすぎない。」⁶³

このように 1780 年代末になると、プレヴォはすでにスミスの経済学を視野に入れていると考えてよいが、同時に彼の見解はジュネーヴの独立を強く意識したものでもあった。

(3) 『ジュネーヴ、平等、独立、自由』(1793)

そうした状況を一層明確に反映しているのが、1793 年初頭に出版された『ジュネーヴ、平等、独立、自由』⁶⁴である。本文開始ページに「ジュネーヴ共和国 258 年」⁶⁵と記されたこの著作では、彼はジュネーヴ共和国がフランスに併合されかけるといふ 1792 年の危急の事態をうけて、ジュネーヴがフランスに併合された場合には、どういうことが予想されるかを論じている。もちろんプレヴォは上述のジュネーヴ共和国の年号表記や本文中の「いったい誰のためにわれわれは独立を放棄できるだろうか」⁶⁶といった表現に端的に示されるように多くのジュネーヴ人と同じく併合に反対の立場である。この著作の中で展開されている議論はジュネーヴの独立、自由、平等に関する議論が中心であり、それは、1793 年初頭時点でのプレヴォのフランス革命評価でもあるのだが、そこにはまた経済に関する議論も見られる。ジュネーヴの穀物

59 Prévost [1789], p. 11.

60 Prévost [1789], p. 11.

61 Prévost [1789], p. 12.

62 Prévost [1789], p. 16. 二百人評議会は当時のジュネーヴ共和国の議会に相当する機関である。

63 Prévost [1789], p. 16.

64 Prévost [1793].

65 Prévost [1793], p. 4.

66 Prévost [1793], p. 24.

の輸出禁止についての疑問、フランスに併合された場合のアッシニア紙幣の強制的受容への危機、ジュネーヴが独立を維持した場合に議論にのぼってくる対仏通商条約への疑念等、様々なフランス併合にかかわる経済問題に対する彼の考え方が明らかにされている⁶⁷。

ここに見られるプレヴォの考察は無制限に経済的自由を容認したものではない。ジュネーヴに生まれ育ち、ジュネーヴのアカデミーで経済学の講義を行ったプレヴォにとっては自然なことであるが、彼はジュネーヴの独立、自由を維持するため経済学的思考をジュネーヴにどのように適用したらよいかという視点から考察を進めている。その結果、彼は上に述べたような経済学を政治体の統治の学と考える古い経済学の考え方だけでなく、新しいスミスの経済学にも通じることになったのであろう。ではその場合、プレヴォの考えるスミスの経済学とはどのようなものだろうか。それは「諸国民の富の本質と原因に関する研究」という『国富論』の正式書名が示すように諸国民に普遍的富裕と繁栄をもたらす「富の理論」であり、プレヴォ自身がスミスによって「博識に、深く扱われた」⁶⁸と書いているものなのである。

以上の三点はプレヴォ自身の著作であるが、次に取り上げるのは彼が携わったスミスの著作の翻訳である。

(4) アダム・スミス『哲学論文集』仏訳(1797)

1795年にはイギリスでアダム・スミスの『哲学論文集』が出版されるが、プレヴォはすぐにこの著作の仏訳の出版に着手することになる。プレヴォ自身が訳者として翻訳の事業を進めた理由は、何といてもプレヴォが哲学者としてスミスのこの著作に関心があったからであるが、同時にプレヴォがスミスに対して尊敬の念を抱いており彼の経済学に関心を持っていたということも忘れてはならない。さらに、翻訳が具体化するには、プレヴォとD. ステュアートとの親密な関係が大きく影響している。

このあたりの事情については、『哲学論文集』仏訳に収録されたプレヴォ自身の論考「スミスの死後に刊行された著作の私の翻訳の後に付けられた考察」が参考になる。プレヴォのこの論考自体はすでにD. シュルツが指摘⁶⁹しているように、哲学における18世紀後半のスコットランド、フランス、ドイツの関係を検討する際の非常に貴重な資料となっているが、その中でプレヴォは、次のように述べている。

「翻訳すべき多数のすぐれた著作の中から、私が公に提供する著作を選んだ理由についていくらか言っておくべきであるように思われる。そこで、私は、それが著者に対する私の深い尊敬のためだと言おう。長い間、アダム・スミスという名前は、私に賛嘆を抱かせたが、その讃嘆は、最もうれしいことに今日ではついに、あらゆる偏見や誤った利害に対し優位を占

67 Prévost [1793], pp. 34-5, pp. 40-1, p. 42.

68 Malthus [1809], t. 3, p. 324.

69 Cf. Schulthess [1996].

めた一般的意見と一つになっているかのように見える。第二に、私は、私にとって大変貴重なドゥガルド・ステュアート氏との交友関係という利点を享受しているが、その利点はスミスの名が大切な人たちにとってたいそう興味深い論文によってステュアート氏が価値を高めた著作に、私の注意を向けさせたのである。ステュアート氏が、この企てに賛成してくれたことは、それが彼の見解を利用する便宜を提供してくれればくれるほど、私にとってそれだけますます実質的な勇気づけとなった。」⁷⁰

ここでプレヴォが、「スミスの名が大切な人たちにとってたいそう興味深い論文」と述べているのは、D. ステュアートが、『哲学論文集』につけた「アダム・スミスの生涯と著作」のことである。そこにはよく知られている次の文章が見られる。

「国家を最低度の野蛮から最高度の富裕にみちびくために必要なものは、平和と軽い税と、正義がある程度守られていること以外には、ほとんどない。その他のすべてのものは、事物の自然の成り行きによってもたらされる。この自然の成り行きを妨げたり、事物を他の路に押しやったり、あるいは社会の進歩を特定の点にとどめようとする、すべての統制は不自然であり、そして、みずからを維持するためには抑圧的、専制的たらざるをえない。」⁷¹

いわゆるスミスの「不変の主題」と呼ばれているものであるが、これを含んだステュアートの論文が『哲学論文集』仏訳の中で約4分の1弱のページ数を占めているのである⁷²。従って、少なくとも、1790年代中葉にはプレヴォは、D. ステュアートのおかげで経済学を含むスミスに関する研究の当時の最先端に接していたと考えてよいだろう。

けれども当時のプレヴォの場合、研究環境が必ずしも安定していたわけではない。上述のように1794年には反革命容疑で投獄されているし、『哲学論文集』仏訳が出た翌年の1798年にはジュネーヴ自体がフランスに併合されてしまう。その結果、彼はフランス人ピエール・プレヴォとなるのであり、彼を取り巻く経済学の世界も時代とともに大きく変化することになる。そこで次にフランス併合期の彼の経済思想を見てみることにしよう。

2. 中期の経済思想

フランス併合期のプレヴォの経済思想は、基本的にそれまでの富の理論を継承している。例えば彼は、1804年に上述の雑誌『ビブリオテーク・ブリタニク』誌上で「経済学という科学においてアダム・スミスの『国富論』は大きな名声を得ており、それ以上に尊敬に値するよう

70 Smith [1797], t. 2, p. 270.

71 Smith [1797], t. 1, p. 116.

72 プレヴォによる『哲学論文集』仏訳は283ページの第一分冊、316ページの第二分冊から構成されているが、D. ステュアートが著した「アダム・スミスの生涯と著作」は、第一分冊の中で135ページとその半分弱を占めている。

に思われる権威はほとんど存在しない」⁷³と述べている。また、同時期に出版されたB.ベルの翻訳『欠乏』につけた「序文」においてもプレヴォはスミスならびにスミスの経済学を高く評価している⁷⁴。従って、この点でプレヴォの初期の経済思想と比較して大きな変化は見られない。変化が見られるのは、人口論の扱いということになる。

イギリスでマルサスの『人口論』初版が発表されるのは、ジュネーヴがフランスに併合されたのと同じ年1798年であり、初版がイギリスで注目されて、大きな成功をおさめたことはよく知られているとおりである。この著作は大陸でも一定の温度差を伴いつつ論壇に影響を与えることになるが、これに少なからず関わっていたのがプレヴォなのである。彼は、まず1805年『ビブリオテーク・ブリタニク』誌上で『人口論』を紹介する。そして翌年には同誌に「人口の原理についてのマルサスの著作によって示唆されたいくつかの考察」⁷⁵と題した論文も掲載する。それだけでなく彼は、1809年になると『人口論』原著第四版の仏訳を部分訳の形で出版することになる。こうした『人口論』をめぐる状況の進展には彼のイギリスとのつながり、具体的にはすでにロンドンにいる彼の息子たちやマーセット夫妻の存在が影響しているわけだが、この翻訳にはプレヴォが書いた「訳者の序」と「訳者のいくつかの考察」が付けられており、われわれはこれらの論考からこの時期のプレヴォの経済思想を知ることができるのである⁷⁶。

特に「訳者のいくつかの考察」は重要である。その中で彼は、もともとマルサス『人口論』が出版される以前から人口問題に関心があったことを明らかにしており、1793年6月にジュネーヴ共和国から人口問題を含む「抑制(maîtrises)の問題」⁷⁷についての意見書を求められ、彼が提出した意見書の中で示した自らの見解を次のように説明している。

「漸進的人口は、ある限度まで、まさしく幸福の原因であり徴候である。しかし、この限度を越えると、漸進的人口はあらゆる利点を失う。それ故われわれは、増加的人口が国家にとって過度の負担となる時期からどれくらい隔たっているのかを知ることに関心がある。というのはもしわれわれがそこに達するか、あるいは通過してさえいる場合には、人口を助長する傾向のあるあらゆる法は無益であるか、あるいは危険でさえあるからである。この限界を明確に示すことはおそらく不可能である、だが様々な理由がわれわれにそれを越えたと考えるように仕向けるのである。」⁷⁸

73 Bb, t. 27, p. 4.

74 Bell [1804], pp. v-vi.

75 “Quelques remarques suggérées par l’ouvrage de Malthus sur le Principe de population”, Bb, t. 31, pp. 23-55.

76 プレヴォによる『人口論』の仏訳が実現するに至る経緯については永井・柳田編[2010]所収の拙稿「マルサス人口論のフランス語世界への波及」を参照されたい。またこの時期のマルサスとプレヴォの間の書簡を中心としたやり取りについては、Zinke [1942]が有益である。

77 Malthus [1809], t. 3, p. 318.

78 Malthus [1809], t. 3, pp. 318-19.

この記述は、ほぼ同時期に書かれた上述の『ジュネーヴ、平等、独立、自由』の中でプレヴォが「ジュネーヴの人口増加および、われわれの近隣のこの絶えず人口を増加させるに至っている傾向」⁷⁹に言及していることと符合しており、ジュネーヴという特殊な一地域についてではあるが、彼がマルサス人口論との接触以前から人口増加の問題を強く意識していたことを示している点で興味深い⁸⁰。

けれどもさらに注目すべきなのは、プレヴォが考える経済学と人口論の関係である。これについて彼は、「訳者のいくつかの考察」のなかで次のように述べている。

「人口と富は、そのもとで経済学のあらゆる原理が整理される二つの標題である。……これら二つの標題のうち、一方は、半世紀足らず前に、博識に、深く扱われた；他方は、私がその翻訳を公表した著作の中で扱われている。私が、それについて相関関係を示し、関連づけを準備したいのは、これら2部門である。」⁸¹

これを見ると、この時期のプレヴォは、「経済学という科学全体が、それに立脚している一般的真理とは別に：その解決が、人口の原理の考察に依存している個別的諸問題」があるということをも十分認めており、彼にとって人口と富が経済学の中で重要な2つのテーマであったことがわかる。彼は、名前こそ明示していないものの、このうちの富は、アダム・スミスが『国富論』で取りあげ、人口は、マルサスが『人口論』で扱ったとして、彼らの研究をもとに富と人口の相関関係を示し、これらの関連づけをしたいと述べているのである。では、彼はなぜ富と人口の関連を明らかにしたいのだろうか、それは、次の文章が示している。

「経済学の原理は、確立された。だが、それらは、まだ孤立している。この壮大ですばらしい科学の二部門を一体の学説に統合する必要がある。おそらく新しい形態ではあるが、同一の明晰さ、自由さ、深遠さをもって提示された富についてのアダム・スミスの研究は、人口の原理についてのマルサス氏の研究と組み合わせられるべきである⁽¹⁾。その結果、重要な真実と容易な適用が強固にうまく結びついた一つの体系が生まれるだろう。」⁸²

これによりプレヴォが考えていたのは、経済学の諸原理は確立されたが、それらの原理は孤立しているので、特に富と人口の関連をさらに明らかにして、それらを一体の学説に統合しなければならないということだとわかる。一言でいえばスミスとマルサスをつなぐということになるだろうが、マルサスの『人口論』だけでなく、スミスの『哲学論文集』も翻訳しているプレヴォ

79 Prévost [1793], pp. 20-21.

80 人口増加の問題を強く意識していたのはプレヴォだけではない。ジュネーヴの「エリートの間へのマルサス思想の普及」についてはペルーを参照。Cf. Perroux [2006], p. 238.

81 Malthus [1809], t. 3, p. 324.

82 Malthus [1809], t. 3, p. 339.

にとっては、スミスとマルサスをつなぐというのは、自然なことだった。

だが、それだけではない。注目しておかねばならないのは、ここに見られるプレヴォの見解は、D. ステュアートの次のような見解を想起させるということである。

「私が今、専念すべき問題は、国富についてのわれわれの考察を人口というテーマについてすでに述べられたことに結びつける環(link)である」⁸³

これは、D. ステュアートの「経済学講義」の文章である。プレヴォ自身が上の引用で「富についてのアダム・スミスの研究は、人口の原理についてのマルサス氏の研究と組み合わせられるべきである」という時に、彼がステュアートほど生産的労働の概念を重視していたかは、今後さらに検討を要するであろう。だが、少なくともプレヴォの見解にはD. ステュアートの見解と共通している部分が多く、スコットランド啓蒙の影響をかなり受けているのは間違いない⁸⁴。

また上の「訳者のいくつかの考察」の中でプレヴォは、前ページ下部に引用した部分に次のような注を付けている。

「(1)ガルニエ氏やセー氏、シモンド氏のような経済学の真の原理を広めるのに貢献した著者たちは、まさにそれによって、これらの原理の組み合わせをより容易にし、この仕事を準備したように思われる。」⁸⁵

引用の中の「ガルニエ氏」とは、ガルニエ版『国富論』仏訳(1802)の仏訳者として当時名高かったジェルマン・ガルニエ⁸⁶のことであり、「セー氏」は、言うまでもなく『経済学概論』(1803)の著者J.-B. セーである。そして「シモンド氏」とは、『商業の富』(1803)を著したシスモンディ⁸⁷のことであるから、ここからわれわれは、スミスが亡くなりリカードが登場するまでの時期、もっと細かく言えば19世紀の初頭にプレヴォがイメージしていたフランス経済学の状況を垣間見ることができる。すなわち当時のフランスでは、G. ガルニエの『国富論』仏訳登場を契機としてスミス経済学が従来以上の勢いでこの国に浸透するとともに、スミスの影響を受けたセーとシスモンディの著作が相次いで出版されるという形でもイギリス経済学の流入が見られたのである。プレヴォ自身もまた、こうした流れの中に位置していたわけであり、彼によればガルニエ、セー、シスモンディは、それぞれ「真の真理を広める」知的活動によってス

83 D. ステュアート『全集』第8巻, p. 258.

84 これは、ピクテ兄弟のような『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の編集者たちの問題関心とも共通している。

85 Malthus [1809], t. 3, p. 339.

86 Germain Garnier, 1754-1821. G. ガルニエおよび彼による『国富論』の仏訳については、喜多見[1995]、喜多見[1998]を参照。

87 シスモンディは、もともとシモンドという名であった。

ミスとマルサスをつなぐ「仕事を準備した」ことになる。

プレヴォによる『人口論』仏訳は、このようなイギリス経済学の着実な流入を背景として「あらゆる時と場所において真理であるが、著者〔＝マルサス〕が賢明にも、彼の国に適するように気を配っている諸原理をフランスの土壤に適合させる」⁸⁸ことをめざして行なわれたと考えることができ、プレヴォの経済思想の特徴をよく示しているといつてよいだろう⁸⁹。

3. 後期の経済思想

ここで検討するのはナポレオン体制の崩壊以後のプレヴォの経済思想である。この時期、プレヴォのいるジュネーヴはフランスへの併合状態を脱して独立を回復するが、間もなくスイスに加わる。隣国となったフランスは王政復古の時代となり社会には保守的思潮が支配的となる。ジュネーヴが新たに加わったスイスでも傾向は、あまり変わらない。ただし、経済学の世界にこうした傾向が直接反映されるわけではない。イギリスでもフランス、スイスでも、むしろこれとは違った新しい動きが見られる。すなわち、イギリスではリカードの『経済学および課税の原理』（1817）やマルサスの『経済学原理』（1820）が出版され、フランスでもナポレオン体制下で沈黙を余儀なくされていたJ.-B. セーの『経済学概論』の第2版（1814）、第3版（1817）、第4版（1819）が出現する。彼らのスミス経済学の継承の仕方はそれぞれ異なるにせよ、スミス経済学を継承する次世代の経済学の本格的登場と言ってよいだろう⁹⁰。イギリス、フランス、ドイツの知的世界と密接なつながりのあったプレヴォがこうした動きと無関係なはずがない。彼の身近なところでもマーセット夫人の『経済学対話』（1816）やシスモンディの『経済学新原理』（1819）が出版される。

プレヴォが当時、直接かかわっていたのは、マーセットの『経済学対話』のフランス語世界への紹介とマルサス『人口論』仏訳の新版（1823年）である。このうち『経済学対話』については、プレヴォ自身が原典の出版された1816年に『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌⁹¹でこの著作を紹介⁹²しているし、翌1817年に『経済学対話』の仏訳を出版したのも彼の三男ギョーム⁹³である。

88 Bb, t. 30, p. 430.

89 だが、こうした動きに批判がなかったわけではない。フィジオクラートの生き残りデュボン・ド・ヌムールは『人口の原理についてのマルサス氏の本の検討：この本のフランス語版で削除された四つの章の翻訳つき』と題された本を出版し、『人口論』の1809年版仏訳でフィジオクラシーに関連した諸章が削除されていることを取りあげプレヴォを批判する。これなどは、まだフィジオクラシーの影響から完全には自由でない大陸のフランス語世界の当時の状況を示していると考えてよいだろう。（Cf. Dupont de Nemours, [1817].）デュボンはこの著作を、晩年、新大陸に渡ってから出版したので、出版年は1817年となっている。デュボンの批判の詳細については永井・柳田編[2010]所収の拙稿「マルサス人口論のフランス語世界への波及」を参照されたい。

90 J.-B. セーの経済学については鈴木編[2005]所収の拙稿「ジャン＝バティスト・セー — 習俗の科学から実践経済学へ」を参照。

91 *Bibliothèque universelle des sciences, belles-lettres et arts : faisant suite à la Bibliothèque britannique*. (以下Buと略記する) この雑誌も、Bbと同様「文芸」、「自然科学および技術」、「農学」という3つのシリーズからなり、1816年から1835年まで刊行されていた。

92 Bu, t. 2.

93 Guillaume Prévost, 1799–1883.

プレヴォが行った『経済学対話』の紹介で注目すべき点は、まず第一に、経済学の生成と有効性について彼が次のような認識を示していることである。

「経済学は現代的科学である、そして前世紀の中葉もしくは終わりの頃によりやくきちんとした形をなした。政治家たちがこの実践的科学の原理のうちのいくつかを知らねばならなくなってからそれほど長くないし、あらゆる階級の観察者が経済学の原理を理解する必要があるわけでもない；しかしばくぜんとした直観の類は、習慣や欲得ずくの誘惑に抵抗するには十分でなかった；そして、恐らくよい理論の効果ほど、富を増殖させる術において顕著なものは決してない。」⁹⁴

この論述からプレヴォが1816年の時点で、18世紀中葉から後半に「富を増殖させる術」としての経済学が生成、確立されたと認識していて、しかもこの科学が当時の社会において有効かつ重要なものであったという点をよく承知していたことがわかる。そして彼は、この後の部分、すなわち彼がJ. ステュアート、G. ガルニエ、J.-B. セーの経済学の定義を説明した箇所、富の理論としての経済学について次のように述べている。

「それは、……彼〔セー〕の学術的な概論の計画が従っているものである。経済学は富を扱う科学である。それは、富がいかに生まれ、広まり、消滅するか、すなわち、富の発達を助長したり、衰退をもたらしたりする諸原因、富の人口、国力、人々の幸福や不幸への影響を示す。」⁹⁵

ここにもプレヴォの富の理論としての経済学観が示されており、それはセーの経済学観に比較的近いものだったと考えてよいだろう。だがプレヴォは、セーの経済学をそのまま受け入れているわけではない。それは下の第二の注目点が示している。

第二に注目すべき点は、プレヴォが機械の導入のような時代の新しい変化を明確に意識していたことである。彼は、『経済学対話』を紹介した論文に注をつけ、機械の導入によってあらゆる種類の労働が単純化された場合について次のように述べている。

「疑いなく、富者はあらゆるものに富むだろう。貧者の側が、この豊かさの中で現在よりもずっと盛大であるということはそれほど確実でない；印刷所の印刷工や綿工場の労働者が、写本者や紡ぎ手よりもずっとよく扱われるということは、うまく論証できないのである。さまざまな形で示されたこの考察は、富の理論をは作れても幸福の理論は作れないということ

94 Bu, t. 2, p. 343.

95 Bu, t. 2, p. 344.

を十分に示している。』⁹⁶

つまり富者はあらゆる面で豊かになるかもしれないが、労働者がより良く衣食住を享受できるとは限らないことを指摘しているわけであり、機械の導入がもたらす影響についてプレヴォがセーほど楽観的でないことがわかる。けれどもだからといってプレヴォが、この点でシスモンディと同じ様に懐疑的なわけではない。プレヴォは、『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌に掲載されたほぼ同時期の論文「哲学教授ピエール・プレヴォ氏のシャルル・ピクテ氏への手紙」で次のように述べている。

「私は農業、工業、知識のあらゆる進歩は、非常に大きな幸福(un très-grand bien)であり、それらは人口過剰を生みだすどころか、多くの自由と賢明な代議政体によって、人口過剰を未然に防ぐと考えています。』⁹⁷

結局パッペが書いているように、「プレヴォはシスモンディの関心を分かち合っていた、だが彼はシスモンディと意見が一致しなかった。シスモンディによれば技術進歩は、労働者の機械による代替をつうじて相対的人口過剰を生み出し得る。プレヴォは、この見解から公に離れることが望ましいと思った」⁹⁸といったところが妥当であろう。そして同じ論文の中でプレヴォが『新原理』に言及した次の文章は、彼とシスモンディが必ずしも同意見でなかったことを裏づけているとみてよいだろう。

「私が『新原理』に攻撃をしかけることを楽しんでいと思わないでください。それは、壊れやすい基礎の上に立った立派で高貴な体系(bel et noble édifice)なのです；それは、一人の博愛主義者によって著わされ、早晩有益な応用を見いだすであろう著作なのです。』⁹⁹

ここにはシスモンディのかつての先生として、『新原理』を好意的に評価しながら、彼の見解とは距離を置くプレヴォの微妙な立場がよく示されている。

第三に注目すべき点は、プレヴォが「経済学と道徳のあいだの精巧な結びつき」¹⁰⁰を認めていることである。彼は、ここで紹介している『経済学対話』自体が初学者向けの著作であることに関連し、若者への経済学教育が適切であるか否かを問題にし、次のように述べている。

「おそらく経済学の初歩を若者たちの手の届くところにおくことの適切さに疑問が呈される

96 Bu, t. 2, p. 352.

97 Bu, t. 14, p. 26.

98 Pappe [1963], p. 73.

99 Bu, t. 14, p. 22.

100 Bu, t. 2, p. 355.

だろう。だがもしこの科学が、政策(la politique)と結びついてはいるが、容易にそれから分離可能で、道徳と密接につながっていて、特に善行(bienfaisance)への指針として役立つはずだと考えるなら、それ〔その科学＝経済学〕が両性の教育に入り、自由教育(l'instruction libérale)の必須部分になることを望むのにやぶさかではない。』¹⁰¹

こうしてプレヴォは積極的賛成とはいえないにせよ、若者への経済学教育に賛成するとともに、経済学と道徳の関連にも着目しており、善行への指針としての経済学の潜在的可能性も認めているのである。このようにプレヴォが『経済学対話』を紹介した文章は興味深い論点をいくつも含んでおり、この時期の彼プレヴォの見解を知るうえで有益であるが、『人口論』仏訳の新版も忘れることはできない。

1823年にプレヴォは『人口論』原著第5版の全訳を出版している。ギョーム・プレヴォも訳者に加わったこの版には、新たに「訳者の最後のノート」という論考が追加されており、その中では本稿21ページに示した1809年版に付けられたピエール・プレヴォの注(1)が再び問題にされ、次のように述べられている。

「セー氏とシスモンディ氏、前者は彼の『経済学概論』の最近の諸版において、後者は彼の『新原理』において、経済学の重要な一部門として人口を取り扱った。後者が、マルサス氏の著作の初版に続く諸版に目を通していないのは残念である。その結果生じる見かけの対立は、実際はこれらの二人の著述家が、同じ原理について語る際、意見が異なり得るいくつかの点を除いて結局のところ同じ学説を主張するのを妨げない。』¹⁰²

ここでは人口論との関連においてはああるが、1809年版『人口論』仏訳出版以降の大陸における経済学の新しい動き、具体的にはセーの『経済学概論』の最新版やシスモンディの『経済学新原理』が取りあげられ、特にシスモンディに批判的言及がなされているのが興味深い。

これらを合わせて考えるなら、彼の後期の経済思想は、富の理論としての経済学についての基本的見解は変化しないものの、機械の導入に代表される時代の新しい変化を意識し、リカードゥ、セー、シスモンディ等の経済学も視野に入れることになったといっていよいだろう。

Ⅳ. 「文芸共和国」と経済学クラブ

プレヴォの経済思想はおおむね以上のような変遷をたどって発展したが、ここで彼の経済思想が晩年のような形となるに至った経緯について考えてみたい。もともとプレヴォの考える経

101 Bu, t. 2, p. 343.

102 Malthus [1823], t. 3, p. 297.

経済学自体、すでに上で見たとおり 1780 年代前半まではルソーの『政治経済論』を意識した政治体の統治の学の域にあった。だがその後、彼の考える経済学は、スミスやセーの経済学に代表される富の科学へと変化している。これには、プレヴォが『国富論』を通してスミスの経済学を直接摂取したり、D. ステュアート経由で新しい経済学関連の情報を得たりしたことが影響していると考えてよいだろう。またプレヴォが、スミスがすでに明確化、体系化していた富の理論とマルサスが提示した人口論を接合する必要があると考えるようになったのには何といってもマルサスの人口論に接したことの影響が大きいだろう。さらにプレヴォが、経済学と道德の関連を意識していたことは、彼自身がもともと哲学者であり、D. ステュアートの論文「アダム・スミスの生涯と著作」が収録されたスミスの『哲学論文集』を翻訳して、道德哲学者スミスを高く評価していたのだからさほど不思議なことではないが、これにはやはりプレヴォのマーセット夫妻との親密な交流も影響していると考えるのが妥当だろう。

こうしてみるとプレヴォの経済思想の形成には、当時の知識人や経済学者たちとの接触、交流に拠るところが少なくないことがわかる。II. で見たように若い頃からヨーロッパの主要な国を訪れ、様々な人々と幅広いテーマについて意見を交わしてきたプレヴォにとっては、彼の経済思想はヨーロッパレベルでの知の交流の結果の一部をなしていたにすぎない。では、そうしたヨーロッパレベルでの知の交流を可能にしたものは何か。それは、彼自身の温厚な性格も影響しているだろうが、何といっても長い年月の間にプレヴォの周りに築かれた貴重な人と人のつながりのおかげが大きいだろう。彼は、若くしてルソーと知り合い、フリードリヒ大王によってベルリンへ招聘されており、経済学に関連した人物だけを取りあげても D. ステュアートやマルサスと親しく、リカードゥや J.-B. セーとも交友関係があった。そのうえ彼は、ジュネーヴではシスモンディの先生であり、ジェイン・マーセットは彼の義妹にあたっていた。このような彼を取り巻く多様な人間関係は意図されたものではなく、この時代を生きた 1 人のジュネーヴ知識人のまわりに結果的に生み出されたものである。そして、それは人間同士の直接的対話によってであるにせよ、あるいは、手紙のやり取りや書物をつうじてであるにせよ、知的関心を主要な原動力として国家や宗教の境界を越えた知の交流をもたらし、プレヴォのまわりにある種の「文芸共和国」を生み出すことになった。ここで知識人たちが国家や宗教の境界を越えて知の交流をするといっても、その場合の「知」には経済的知識までが含まれていて、「文芸共和国」の意味するもの自体がエラスムスやベールの時代とは変化しているのは間違いないが、少なくともプレヴォのまわりに「文芸に対する崇拜」で結ばれた真理と道理の支配する自由な領域である「文芸共和国」的環境が生まれていたことは確かである¹⁰³。

具体的に言えばプレヴォを招聘したベルリンのプロシア科学アカデミーでは、彼は当時のすぐれた学者、知識人たちと幅広く交流し、哲学、自然科学、社会科学を自由に研究することができた。そして、III. で取りあげた彼の「現代の政府の経済と比較した古代の政府の経済につ

103 「文芸共和国」という表現の使われ方、その概念については、小倉編[2004]所収の森原隆「フランスの『レピュブリック』理念」が参考になる。

いての論考」もドイツ語圏でありながら当時の文芸の共通言語ともいべきフランス語で発表されている¹⁰⁴。また、プレヴォが5年という長期間家庭教師をつとめ、彼が晩年のルソーと知り合う機会を提供してくれたプロテスタント銀行家のドゥレセル家にしても、ルソーだけでなくベンジャミン・フランクリンやD. ステュアート、ネッケルとも交友関係があり、学術を含む当時の国際的な最新情報が集まってくる特殊な場となっていた¹⁰⁵。さらに出版に関していえば、プレヴォは上述の雑誌『ビブリオテーク・ブリタニク』およびその後継誌である『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』の刊行に協力し、英語世界の学術の最新情報をフランス語世界に紹介するとともに自ら寄稿もしており、この点でも知の交流に貢献していた。そのほかりカードゥの手紙には、彼が1822年に大陸を旅行し、ジュネーヴを訪れた際、E. デュモン邸にプレヴォをはじめシスモンディ、プロイ公爵（スタール夫人の娘婿）、W. ロミリー（サミュエル・ロミリーの息子）等が集まり、そこで経済学の諸問題について活発な議論が繰り広げられたと書かれており、ジュネーヴでもまたプレヴォの周囲に「文芸共和国」的環境が醸成されていたことが見て取れる¹⁰⁶。

こうした環境の根底にあるのは、上述のように人と人とのつながりであるが、このつながりを情報の伝達、交換、融合、創出という視点から見ると、それはある種の知的なネットワークとして捉えることができるだろう。しかもプレヴォの周りに生まれていたこうした知的ネットワークは、国境を越えてジュネーヴ人のネットワーク、ユグノーのネットワーク、銀行家のネットワーク、「イギリスびいき(anglomanie)」のネットワーク、親族のネットワーク等と複雑に重なり合いながらプレヴォの知的活動を支えていたと考えられる¹⁰⁷。『人口論』仏訳の計画が具体化する際のマーセット夫妻の存在に見られるような「家族的ネットワークの<くもの巣>」¹⁰⁸の機能などはその典型と言えるが、プレヴォの経済思想を含む知的活動全体が国際的な知的ネットワークの中で形成されてきたものだといつてよいだろう。

しかも上の知的ネットワークは、様々な形の知の交流の場を生み出し、その中には経済に関する知の交流の場も含まれている。そうしたものの代表がすでに経済学史でも注目されている経済学クラブ(Political Economy Club)である。1821年ロンドンに設立されたこの会についてわれわれは今日、藤塚[1973]から様々な知識を得ることができるが、藤塚氏はこの本の「序説」で次のように述べられている。

「経済学クラブには、経済学史上の（あるいは経済思想史上の）主要人物のほとんどが登場

104 ベルリンのプロシア科学アカデミー、およびそこでの共通語使用に関しては有賀[2010]が参考になる。

105 社会的ネットワークとしてのドゥレセル家の機能については、田中編[2014]所収の拙稿を参照。

106 リカードゥの大陸旅行の際のジュネーヴにおける知識人たちとの交流の様子については、喜多見[2005]を参照。なおジュネーヴの「文芸共和国」的側面については踊・岩井編[2011]所収の小林淑憲「文芸共和国におけるスイス ― ジュネーヴとその周辺」が有益である。

107 こうした重層的ネットワークの形成には18世紀後半の「ジュネーヴの革命」が影響している。

108 Perroux [2006], p. 366.

し、また経済学者のみならず、財界・政界・官界・文筆界などの著名な人びとの多くがこれに参加しているのであって、クラブの歴史をかえりみると、そこにはポリティカル・エコノミーの発展過程、経済思想の展開過程の背景をなす諸事情が、生き生きと反映されている」¹⁰⁹

ここでは藤塚氏は、主にイギリス経済学の世界を想定しておられると思われるが、ここにいう「ポリティカル・エコノミーの発展過程、経済思想の展開過程」は大陸の経済思想にもかかわってくる。プレヴォとこの会のつながりは、やはり親族のネットワーク、ジュネーヴ人のネットワークにもとづいている。ピエール・プレヴォがロンドンでこの会に出席したことに関しては、「1824年6月7日のクラブの会合にヴィジターとして出席」¹¹⁰したという記録が残されているにすぎない。だが、会が創立された1821年の「会員リスト」に記された30名の中には、リカードウ、マルサスとともにプレヴォの長男アレクサンドルの名前があり、マーセット夫妻だけでなくアレクサンドルもまたイギリスと大陸の間の経済情報の交流に貢献していたことが容易に想像できるであろう。それだけでなく、「会員リスト」にはJacques Mallet du Panの息子John Lewis Malletや、Jacque (James) Cazenoveの息子John Cazenove¹¹¹といったジュネーヴ人のネットワーク、ジュネーヴ人脈に属する人々の名も見られるのであり、経済知に対する関心、愛好を原動力として形成された知的ネットワークが国境を越えて形成され、あたかも大陸とイギリスを結ぶ地下水脈のように有効に機能していたことが窺える。なお藤塚[1973]の後編は、『議事録・会員名簿・討論議題』第6巻(100年記念)に収録された上のJ. L. Malletとプレヴォの次男で後に会員となるJ. L. プレヴォの日記にもとづいて構成されているが、大陸から見ると、経済学クラブの活動を知るための重要な資料が上のネットワークに連なる人物たちに依拠しているという点が非常に興味深い。

V. 結び

以上、半世紀近くにおよぶプレヴォの知的活動の成果の一部であるプレヴォの経済思想について、時代による変遷を考慮しつつ検討してみた。それにより明らかになったのは、次のとおりである。

まず初期のプレヴォは、ルソーの『政治経済論』を意識して経済を財政管理あるいは統治といった意味で理解し、経済学についても政治体の秩序ある統治の学といった意味で捉えていたが、その後スミスの『国富論』に接してからは、これを高く評価し、1790年代前半には経済

109 藤塚[1973], p. 1.

110 藤塚[1973], p. 144.

111 J. カゼノウヴについては中矢・柳田編[2000]所収の出雲雅志「もうひとりの「異端者」ジョン・カゼノウヴ」が有益である。

学を諸国民に普遍的富裕と繁栄をもたらす「富の理論」と考えるようになっていた。そして、1790年代後半には、新たに登場したマルサス人口論に注目し、人口と富を経済学における二つの重要なテーマであるとして、富についてのアダム・スミスの見解が、人口の原理についてのマルサスの見解と組み合わせられるべきだと考えるようになる。その後のプレヴォは、基本的見解は大きく変化しないものの、19世紀に入ってから新しく登場するリカードゥ、セー、シスモンディら、スミスの次の世代の経済学も視野に入れ、機械の導入がもたらす影響も意識するようになる。

こうしたプレヴォの経済思想の核心はどこにあったのだろうか。それは、経済学を諸国民に普遍的富裕と繁栄をもたらす富の科学としてとらえ、スミスが『国富論』で体系化した富の理論とマルサスが『人口論』で示した人口の原理をもとに富と人口の関係を明確にし、これらを組み合わせて一つの体系を作ろうとするとところにあった。彼の見解ではスミスの経済学が高く評価され、経済的自由の尊重が大前提とされ、安心して経済活動が行える状況をどうやって作り出すかということが重要な課題となっている。ただしその一方で、彼は人口論の扱いをめぐるデュポン・ド・ヌムールから批判も受けており、フィジオクラシーの引力圏からいかに脱するかといったフランス的課題からいまだに自由でなかったとも言えるだろう。

最後に、彼の経済思想の特徴として指摘しておきたいことは次の三点である。一つは、彼の経済思想が経済学の枠には収まりにくい幅広いものだったということである。彼は、「経済学と道徳のあいだの精巧な結びつき」という彼自身の表現が示すように、幸福や人口の制限といった経済学だけでは扱いきれない問題の存在に配慮するとともに、道徳との関連で経済学がもつ潜在的可能性もよく承知していた。これは、哲学者、文学者、自然科学者でもあり幅広い分野で多くの業績を残したプレヴォにとっては自然なことであろうが、経済の側からプレヴォについて考える場合に看過しがちなことである。ナポレオン没落後のヨーロッパ世界にあって啓蒙思想家の生き残りともいえる存在であったプレヴォの経済学関連の業績は、もう少し幅広い社会経済思想の枠組みで扱った方がよいであろう。

もう一つは彼の思想形成にかかわる。彼の経済思想はルソーやスミスが存命中の経済学の生成期に形づくられ、その後、D. ステュアートやマルサス、リカードゥ、セー、シスモンディ等と交流する中で変化してきた。それは「プレヴォによって当時のヨーロッパに織り成された知的つながりの豊饒さ(*la fécondité*)」¹¹²の中から生まれたものであり、国際的な知の交流の産物であるといえることができる。とりわけD. ステュアートやスミスに代表されるスコットランド啓蒙の影響は大きい。この点は、プレヴォの周囲での哲学をめぐる知的交流の様子を合わせて考えてみると容易に納得がゆくであろう¹¹³。

三点目は、彼を育んだジュネーヴという町の特殊性にかかわる。彼は、この町でジュネーヴ

112 Schulthess [1996], p. 104.

113 プレヴォの周囲での哲学をめぐる知的交流についてはシュルテスの下記の論文が詳しい。Cf. Schulthess [1996].

共和国の市民として生まれ、強制的にフランス帝国の臣民にされ、最後はスイス人として亡くなるという大きな変化を経験しているが、この町は、彼が同時代人として交流したルソー、ネッケル、E. デュモン、シスモンディ等を生み、ヴォルテールに自由な知的活動の場も提供した。彼の経済思想は、町自体がイギリスに親近感をもっていて、ナポレオン帝政下にあっても「一種の継続的百科全書(une espèce d'Encyclopédie successive)」¹¹⁴ともいうべき『ビブリオテーク・ブリタニク』誌を発行し続けたまさにこの町で生まれたものだったといえる。

こう見てくると、プレヴォは、彼が親しく交わっていたD. スチュアートとともに啓蒙の末期に位置する重要な人物であり、「その学生たちに18世紀の遺産の最良のものを提供した」¹¹⁵遅れてきた啓蒙思想家と言ってもよい存在である。七月革命後、1830年代末まで生きて新しい時代の変化を体験している彼であるが、もう一度啓蒙の座標軸で捉え直してみる必要があるのではないか。それは、啓蒙の意味を問い直すことにもつながるだろう。

114 *Bb*, t. 1, p. 7. これは、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌第1巻の編集者の「序文」の表現である。

115 de Salis, Jean-R. [1973], pp. 17-18.

参考文献

- 有賀暢迪[2010],「言語から見たベルリン科学・文学アカデミー — 十八世紀中葉における共通語と地域語についての一考察」,『日本18世紀学会年報』第25号, pp. 18-30.
- 安藤裕介[2014],『商業・専制・世論 — フランス啓蒙の「政治経済学」と統治原理の転換」,創文社.
- 小倉欣一編[2004],『近世ヨーロッパの東と西 — 共和政の理念と現実』, 山川出版社.
- 踊共二・岩井隆夫編[2011],『スイス史研究の新地平 — 都市・農村・国家』, 昭和堂.
- 木崎喜代治[1976],『フランス政治経済学の生成』 未来社.
- 喜多見洋[1995],「G.ガルニエによるスミス経済学のフランスへの導入」,『大阪産業大学論集』社会科学編, 第98号, pp. 49-62.
- [1998],「晩年のガルニエと『国富論』」,『大阪産業大学論集』社会科学編, 第110号, pp. 57-69.
- [2005],「転換期ジュネーヴの知識人たち — スイスの視点から見た西欧社会経済思想史の一齣」,『大阪産業大学経済論集』第6巻第3号, pp. 1-20.
- [2008],「ピエール・プレヴォと *Bibliothèque britannique* — 転換期ジュネーヴに見る知のインターフェイス」,『経済学史学会第72回大会（愛媛大学）大会報告集』.
- 鈴木信雄編[2005],『経済思想④ 経済学の古典的世界1』, 日本経済評論社.
- 中宮光隆[2010],「ピエール・プレヴォの生涯と業績」,『アドミニストレーション』第16巻3・4合併号.
- [2011],「ピエール・プレヴォにおける道徳哲学と経済学」,『アドミニストレーション』第17巻3・4合併号.
- [2012],「『ビブリオテーク・ブリタニク』誌とピエール・プレヴォ」,『アドミニストレーション』第18巻1・2合併号.
- 飯田裕康・出雲雅志・柳田芳伸編[2006],『マルサスと同時代人たち』, 日本経済評論社.
- ディルタイ[1975],『フリードリヒ大王とドイツ啓蒙主義』, 創文社.
- 永井義雄・柳田芳伸編[2010],『マルサス人口論の国際的展開 — 19世紀近代国家への波及』, 昭和堂.
- 中矢俊博・柳田芳伸編著[2000],『マルサス派の経済学者たち』, 日本経済評論社.
- 藤塚知義[1973],『経済学クラブ』, ミネルヴァ書房.
- 田中秀夫編著[2014],『野蛮と啓蒙 — 経済思想史からのアプローチ』, 京都大学学術出版会.
- Bell, Benjamin [1804], *De la Disette*, traduit par P. Prévost, Paschoud.
- Bickerton, David [1986], *Mark-Auguste and Charles Pictet, the Bibliothèque britannique (1796-1815) and the Dissemination of British Literature and Science on the Continent*, Genève, Slatkin.
- de Candolle, A.-P. [1839], *NOTICE SUR M. PIERRE PREVOST. Professeur émérite à L'Aca-*

démie de Genève. (Tiré de la *Bibliothèque universelle de Genève*).

Cherbuliez, A. [1839], *Discours sur la vie et les travaux de feu Pierre Prévost*, imprimerie de Ferd. Ramboz.

Etchegaray, C., & K. Haakonssen, D. Schulthess, D. Stauffer, P. Wood [2012a], “The Context of the Stewart–Prevost Correspondence”, *History of European Ideas articles*, vol. 38 (1).

— [2012b], “The Correspondence of Dugald Stewart, Pierre Prevost, and their Circle, 1794–1829”, *History of European Ideas articles*, vol. 38 (1).

Dupont de Nemours, Pierre-Samuel [1817], *Examen du livre de M. Malthus sur le Principe de Population* ; auquel on a joint la traduction de quatre chapitres de ce livre supprimés dans l'édition française ; et une lettre à M. Say sur son *Traité d'économie politique*, imprimé à Philadelphie,

Kitami, H. [1999], “Trois lettres inédites de Jean-Baptiste Say à Pierre Prévost”, 『日仏経済学会BULLETIN』 第21号.

— [2012], “Pierre Prevost and France : Pierre Prevost's political economy”, in: French Political Economy in the Age of Enlightenment: Perspectives on Social Reform before the Revolution (proceeding).

Malthus, Thomas Robert [1823], *Essai sur le principe de Population, ou exposé des effets passés et présents de l'action de cette cause sur le bonheur du genre humain* ; suivi de quelques recherches relatives à l'espérance de guérir ou d'adoucir les maux qu'elle entraîne. Traduit de l'anglois sur la 5e édition par Pierre Prévost. Deuxième édition française très-augmentée. Genève, Cherbuliez.

— [1809], *Essai sur le Principe de Population, ou Exposé des effets passés et présents de l'action de cette cause sur le bonheur du genre humain* ; suivi de quelques recherches relatives à l'espérance de guérir ou d'adoucir les maux qu'elle entraîne ; traduit de l'Anglois par Pierre Prévost, A Paris, chez J. J. Paschoud, Libraire. A Genève, chez le même Libraire.

Marcet, Jane [1817], *Conversations sur l'économie politique*, traduites de l'anglais par M. Prévost, Genève, J. J. Paschoud, Paris, Même Librairie.

Pappe, Hellmut Otto [1963], *Sismond's Weggenossen*, Genève, Droz.

Perroux, Olivier [2006], *Tradition, vocation et progrès : Les élites bourgeoises de Genève (1814-1914)*, Genève, Slatkine.

Prevost, Pierre [1782], *Etat des finances de l'Angleterre*, Berlin, G. J. Decker.

— [1783], *Mémoire sur l'Économie des anciens Gouvernemens comparée à celle des Gouvernemens modernes*, Berlin, G. J. Decker.

— [1788], *De l'origine des forces magnetiques*. Genève, Barde, Menget & Cie.

- [1789], *Trois lettres adressées au Journal de Genève sur une question de finances*.
- [1790], *Parallèle de deux révolutions*, Paris, Grégoire.
- [1792], *Recherches physico-mecaniques sur la chaleur*. Genève, Barde, Manget & Cie.
- [1793], *Genève. Égalité, Indépendance, Liberté*.
- [1804], *Essais de Philosophie*, Genève, J. J. Paschoud.
- [1809], *Essai sur le calorique rayonnant*. Genève & Paris, J. J. Paschoud.
- de Salis, Jean-R. [1973], *SISMONDI 1773-1842*, Genève, Slatkine.
- Schulthess, Daniel [1996], "L'école écossaise et la philosophie d'expression française : le rôle de Pierre Prévost (Genève, 1751-1839) ", *Annales Benjamin Constant*, N° 18-19.
- Smith, Adam [1797], *Essais philosophiques* précédés d'un Précis de sa vie et de ses écrits par Dugald Stewart Traduits de l'anglais par P. Prévost, Agasse.
- Trousson, R. et F. S. Eigeldinger (éds.) [2012], *Jean-Jacques Rousseau Œuvres complètes et lettres : édition thématique du tricentenaire*, Genève et Paris, Slatkine et Honoré Champion.
- Zinke, George William [1942], "Six Letters from Malthus to Pierre Prévost", *Journal of Economic History*, Vol. 2.

喜多見 洋

(大阪産業大学経済学部教授)

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 71*

発行所 東京都国立市中 2-1

一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 2015 年 3 月 31 日

印刷所 新宿区新小川町 3-9
(株) 平河工業社
